

公的支援ではケアできない援助を

石狩市 石狩思いやりの心届け隊

昨今、大規模災害による被害は東日本大震災や北海道胆振東部地震をはじめ、2019年に入ってから、1月の熊本地方での地震、6月の山形県沖での地震、8月の九州北部豪雨、9月の台風15号による災害、同台風による千葉県での大停電など、枚挙にいとまがない。こうした状況の中、災害救援活動の必要性がますます求められているが、公的な支援活動だけでは限界があり、ボランティアによる組織的な活動が注視されている。

石狩市のボランティアが中心となっている「石狩思いやりの心届け隊」（以下、「届け隊」）は、そうした組織の一つ。石狩市在住のメンバーが中心で、約75人が登録している。東日本大震災や北海道胆振東部地震などの救援活動に貢献しているほか、震災で中断された農作業の手伝いや、倒壊した家屋からの貴重品探し、被災者の心のケアなど、公的サービスでは困難な支援などを継続的に行っている。

■ 援助物資を直接届けたい

届け隊が設立されたのは、2011年（平成23年）に発生した東日本大震災がきっかけ。

同隊長の熊谷雅之さん（51）によれば、当時、石狩市商工会議所青年部メンバーであった熊谷さんを含め青年部メンバー全員で、地震発生直後から緊急援助することを決めたといい。手始めに、飲料水支援としてペットボトル（500ml入り）2400本を石狩市を通じて送ったほか、救済のための寄付を呼びかけ義援金80万円近くを社会福祉協議会を通じて送金した。

「2011年の東日本大震災があった2日後の3月13日、ちょうど商工会議所青年部の懇親会を定山溪温泉で行っていたのですが、懇親会どころか緊急会議になりました。20人ほど集まっていたメンバーが、自分たちもなにか出来ないかと熱く討論、すぐに救援物資を送ろうという結論になりました」と、当時の様子を熊谷さんが語っている。

飲料水や義援金のほかにも、救援物資を直接届けようとなって、同月18日に出発することに決めていたが、行政サイドから「今は、まだ混乱しているのでいけない方がいい」と止められた。

「では、取りあえず救援物資を集めよう」と石狩市を中心に呼びかけたところ、約400人から4万点ほどの物資が集まった。中には、石狩市立南線小学校の生徒らが集めた文房具などもあった。しかし、現地の行政窓口では受け入れ態勢が整わず、救援物資の募集をしたがすぐに受け入れを中止したため、こちらで集まった物資すべてを送り届けることが出来なかったという。

「子供たちの思いを無駄にはいけないと、受け入れできない物資は、直接現地に持っていこうと決めたのです。さらに現地に行けば、炊き出しなどの支援もできると考えました」

こうした経緯から、メンバーが新たな団体を設立して救援活動を実施することを決め、車に物資を積んで熊谷さんらメンバーが被災地に向かった。団体名は、石狩市民の思いを届けたいという願いを込めた。



復興応援のための出店ブースで、特産品販売の手伝いや写真展の説明、寄付などと呼びかけているボランティアスタッフ

■ 農業者への支援活動が必要

2011年に発足した届け隊は、東日本大震災だけでなくその後の様々な災害に対するの救援活動を実施、2018年9月の北海道胆振東部地震の際にも発生直後から、給水や炊き出しなどを行っている。

北海道の地震のとき、「水が足りない」との情報がある前にあったため、ペットボトルの水をダンボールに詰めて持参したところ、飲み水ではなく避難所のトイレなどで使う水などが必要であったと分かり、戸惑ったという。

「現地に行かないと、本当に必要なものが分からないのですよ」

しかし、給排水に関する事なら排水設備工事の会社を経営している熊谷さんの専門分野。さらに届け隊の中心メンバーは、水道設備関係者や建築士、電気工事士などの専門職が多い。すぐに、仲間に連絡してユニック車（クレーン付きのトラック）などの特殊車両や発電機、水タンク、水9千リットルなどを積み込んで再び被災地に向かい、断水地域での支

援を行ったという。

とくに北海道の場合、被災した農業者への継続的な支援が重要だと熊谷さんは訴えている。震災直後、収穫期を迎えた農家では人手不足の問題が深刻で、2週間ほど農作業がストップしてしまった。じゃがいもの収穫や小麦の種蒔きなど、繁忙期に働き手がいない状況が続いたという。

「このままだと雨が降ったり、腐ったりして収穫できない。せっかく半年、1年かけて育てたものなのに。大事に育ててきたものが収穫できないというのはもったいないし、農家の収入減になってしまう」

農業者へのそうした支援は、公的には難しい。社会福祉協議会（社協）では、生活を応援する作業が主で、廃材を片付けたり掃除したりといった活動が中心。農作業は個人の収入に結びつくため、社協を通して町が呼びかけているボランティアでは支援しにくい。

「人手も足りない。農業被害も甚大。だったら俺たちでやろう！ そう思ったのです」

公的な支援活動とは別に、農作業を手伝って欲しいとSNSで呼びかけたところ、手伝いたいという人が次々と手を上げた。登録している届け隊のメンバーだけでなく、北海道大学農学部の学生、看護師、海外で農業体験をしていた人たちが集まった。メーカーの掘り出し作業やかぼちゃの収穫、ビニールハウスや炭窯の修復作業など、きめ細かい支援活動ができたという。

その他、地震で土砂に埋もれた貴重品や遺品など重機を使って掘り出す活動も行っている。被災した家屋は公費で解体されるが、土砂に埋もれたり倒壊したりした家屋から家財を取り出す作業は公的支援の対象外となっているからで、住民からの要請も多い。



農作業は個人の収入に結びつくことから、公的支援が受けられないため、独自にSNSを通じて参加者を呼びかけて収穫作業を手伝った（2018年9月）

■ 行動力がある隊長、対処法も熟知

同隊長の熊谷さんは1968年（昭和43年）生まれ。札幌市の工業高校を卒業後、農機具メーカーのヤンマーに就職。11年勤務した後、石狩市で父親が経営していた水道工事を継いだ。会社を経営するかたわら、熱心にボランティア活動を行っている理由について、東日本大震災の翌月、被災地に直接出かけたことが契機になったという。

「被災地までの道中、被害に遭った人たちにどんな声をかければいいのかと、メンバーと悩んでいたのですが、現地で連絡を取っていた人がニコニコしながら手を振ってくれて、ああ、笑っている

だと思ったのです」と、当時を振り返る。

「そしたら、どこか楽になって、今できることを今できる人がやればいいのか、と思うようになったんです」

熊谷さんは、明るく微笑んだ。

届け隊の広報渉外を担当する酒井一誠さんは、1級建築士で建設会社社長。同会議所青年部のメンバー。隊長としての熊谷さんについて、こう話す。

「熊谷隊長は、とにかく行動力があるのです。思ったことはすぐ実行するんですよ。以前、朝、7時に電話があって、送風機を持ってきてくれ、といきなり頼まれたこともありでしたね」と苦笑する。

「送風機は、水害で浸水した家屋を乾かすのに必要だったのです」と言い加え、同時に当時の状況を説明してくれた。2017年9月に起こった石狩市浜益区の台風災害で、浜益区372世帯に避難指示があったときのことだ。熊谷さんは、すぐに被災地に状況を見に行き、想定外の水害で驚かされたという。

「床下はびしょびしょ。断熱材も濡れているので、床材をはがして撤去しないと」

住宅設備の仕事に携わっている熊谷さんは、どういった対処が適切なのかを熟知していたため、送風機などの機材と共に、酒井さんや電気関係のスタッフなども呼び集めたのだという。

ボランティアスタッフとして、活動を手伝っている種田恭子さん（札幌在住）は、石狩市のイベント

石狩思いやりの心届け隊

会場で届け隊のことを知り参加するようになった。とくに、届け隊が宮城県石巻市で毎年行っている交流イベント「北海道うまいものBBQ」には、欠かさず参加しているという。この交流イベントは、被災地の雄勝地区へ物資を届けるとともに炊き出しも行ったことがきっかけで始まり、その後も毎年5月初旬に開催され、2019年で8回目となる。「東北のみなさんに毎回お会いするのが、楽しみになっています。北海道の旬の食材を食べて元気になってもらいたいですし、地域の人々が集まれる機会になれば」と種田さんは話していた。



「石狩さけまつり」(2019年9月)で、東日本大震災の復興応援を呼びかけている「石狩思いやりの心届け隊」出店ブース

■ 農業者の支援が出来る制度作りを

届け隊の運営費については、イベントでの収益や寄付によって運営費を賅っているほか、日本財団や、「いぶり基金」(被災地支援基金)からも助成を受けているという。ただ、重機や専用機材などを使えば費用が高いため、どうしても自己負担が増えてしまう。もっと助成金などの支援や、企業からの物的支援などを受けて活動の幅を広げていきたい、と熊谷さんが話していた。

今後の目標については、「北海道は、農業者あつての北海道。農業支援をもっとできないかを考えています。いろいろな関係機関に呼びかけて、そうした仕組みをつくり、本当に困っている生産者を助けたいです。また発災時初動での公的支援には限界と優先順位があり、住民に寄り添う支援は、ボランティアでなければできないのです。今後はもっと技術系のボランティアを道内で発展させていきたいです」と、意欲を見せていた。

■ 連絡先

〒061-3211
石狩市花川北1条4丁目47(石狩設備内)

代表者：熊谷 雅之(くまがい まさゆき)

電話：0133-74-9110
FAX：0133-74-9713
E-mail：ishikari@coccoa.ocn.ne.jp